

ハルが来るまで

加藤文子

みどりをたたえていた通りを隔てた牧草地も、氷点下の朝が訪れる頃には褐色を帯びる。落葉した木立に囲まれた土色のひろがる牧草地を見ると、しんみりした気持ちになる。この心もとない感情は、いつも冬を迎えた頃にどこからともなくやって来る。

以前は牧草地と後ろ隣りに面した別荘地のあいだには杉の防風林があった。どうした理由か、あるとき伐採が進み、あつという間に防風林は姿を消した。あたり前のように見てきた景色が一変した。

それまで見えなかった別荘地が現れて、木々のなくなった風景に物足りなさを覚えた。

赤く燃えた夕空が杉の木々をシルエットのように映す。まるで別世界に誘われていくような光景だ。

雪を纏った防風林、冬色に染まった常緑の葉にみどりが蘇る春の萌しも、牧草地と杉の木々は空



を背景にたくさんのシーンを見せてくれた。

日が落ちる頃、別荘の家々に明かりが点る。向こうからはこちらがどんなふうに見えるのだろうか。十二月のはじめ年内最後の催しが終わり、お礼状書きや山積していた用事も、ひと通り片付いた。片付くと同時に、心に溜まった諸々が発散されていくようで気分が軽くなるのだった。もうこれ以上何もできないと思われていた心にスペースができて、やらなければが、やろうかな、そのうちぜひやりたいに変化するのには不思議だ。いつの間にか、ヤルゾー気分が満ちている。

再来年度のカレンダーや展覧会のための鉢づくりをはじめ。

まずはパソコンに取り込んだたくさんの画像からカレンダーに使えそうなものを選び出す。春の空気、夏の空気、秋も、冬も、それぞれの空気を呼び寄せてイメージしてみる。イメージしながら力を抜いてボンヤリ見ているうちに候補が浮かび上がる。

選択のポイントは、ワクワクするか否かを大切にして各月ごとに当て嵌めてみることだ。何度も作業を繰り返しているとパズルが嵌まるようにカチツと決まる。

冬のあいだ夫が私のために期間限定で、アトリエの仕事机の一角を空けてくれているので、カレンダー制作と並行して鉢づくりも行っていく。

外仕事のできない雨や雪の日は、鉢づくりにもってこいだ。期間限定なのだからチャンスを逃すわけにはいかない。

コンクリートの床のアトリエは特別寒いので、ジャンパーやオーバーパンツを着込んでのぞむ。家の中なのになんて大袈裟なんだろうと我ながら可笑しくなる。

一年振りに粘土に触れる。覚束ない手先も、粘土をまるめているうちに要領を思い出す。

快適に根を伸ばし、灌水した水がスムーズに行き渡り、表面の土から陽のぬくもりも程良く内部まで伝わって、安心して生命を委ねてくれるような植物の住まいを……。

そんなことを願って、開口部や深さを考えながら鉢をつくってみる。

何はともあれ、私の気持ちはとても前向きなのだから……。

春が来るまでに冬の仕事をたくさんしたい。



防風林の並ぶ牧草地の風景